

書評「上海モダン『良友画報』の世界」

阮玲玉と『良友』の路地裏 ——上海モダンの「かくれた次元」としての 空間性をめぐって

木之内 誠

いまあらためて本書を手にとってみると、その文字通りの重厚さに敬服しっぱしである。執筆者の方々が以前から続けてこられた旺盛な研究会活動の新たなそして大きな成果として、本書の刊行を祝いたい。かつての上海の多面的な相貌を画像に伝えて、魅力的でまた象徴的な意味を持った雑誌『良友画報』の全体像にせまる画期的な論集である。

『良友』1935年2月号の表紙をそのままってきた本書のカバーを眺め、チャイナドレスの女性の視線に射すくめられているうちに、「時代のカリスマとしての女性像」などというフレーズが自然に頭に浮かんでくる。そしてこのカバーをはずしてみると、本体表裏の厚紙の表紙には旧上海の地図が印刷されている。眺めているうちに、なかなかこれはこれで、なにげなく意味深い装丁の意匠となっているのではないかという気がしてきた。モダン上海に繰り広げられた多様で濃密な都市生活の諸活動を、いわば「裏打ち」した空間性、地理的背景のようなものをここにさりげなく示しているように、私には思われたのだ。

そしてよく見るとこの地図（1925年7月上海・至誠堂刊「上海新地図」か）には、南京路がバンドに出たところあたりを基点とした半径1マイル刻みの同心円が描かれている。『良友画報』の編集発行元だった良友公司

は、ちょうどこの中心から1マイルの線上にほぼ重なる、共同租界の境界線からわずかに北へ出た位置に、1925年に開業した路地裏の小さな印刷所だった。ここ北四川路鴻慶坊は租界の外ではあるが、「租界の外の租界」たる「越界築路」沿いの、中国側と外国勢力の支配権が交錯するグレーゾーンの場所でもあった。

販路の開拓に苦しんだ『良友』の創刊号を、人通りの多い北四川路の通りのオデオン劇場の前で、印刷所の見習い工にたたき売りさせたという逸話が残るのは、1926年の旧正月のことだ。今回鴻慶坊の正確な所在を知ろうとして、『虹口区地名志』にも記載はなく、なかなか調べがつかなかったのだが、2017年夏刊行された三冊本の『上海城市地図集成』（孫遜他編、上海書画出版社刊）に収められていた1929年6月市政府公布の「上海特別市道路系統図・閘北区」という図面のなかによりやくその名を見付けることができた。現在の番地でいえば四川北路1451号付近、道路が北に向かって高架4号線のガードをくぐる手前の西側裏手一帯にあたる。そこはたしかに、当時開館したばかりの豪華映画館オデオン劇場の真裏に位置する狭い路地だった。

また当時、ここは上海のなかでも広東出身者がとりわけ多く住む界隈だった。鴻慶坊の西側にはその名も広東街という通りが延び、現在は福州路で広東料理の老舗として知られる「新雅粵菜館」が、1927年に最初に茶館を開いたのも、オデオンから通りを南へほんの目と鼻の先の場所だったし、広東の地方劇粵劇の劇場「広東大戲院」は、ここから北四川路を北へ150mほどのところで1931年に開場している。広東人子弟のために開かれた学校の広肇公学や広東人の集う基督教会などもここから遠からぬところに立地していた。広東語がしきりに飛び交う街角だったのだろう。広東人移民の二世だった女優阮玲玉も、十数回の転居を繰り返した短い生涯のうちに、この鴻慶坊に住んだことがあった。1926年1月ここに転居した

彼女は、おりしも表通りに響く『良友』創刊号の売り声を聞いていたかも知れない。自分がその表紙を飾る日の来ることを、広東なまりの17歳の駆け出し女優は想像していたろうか。

この場所で『良友』と阮玲玉がたまさか接点を持ったとしても、それが決して偶然の出会いとはいえないものだったことは、本書の読者には自明のことだろう。広東出身の創業者伍聯徳と同郷者集団の上海での奮闘ぶりと、郷里の広東、香港さらに海外華僑らへとつながる販路拡大と雑誌発展の道筋は、本書の孫慧敏、林美莉、村井寛志諸氏の論文に詳述されている。こうしたマクロなレンジとスパンで生起した事象とともに、一方でこの街に生きた人々の日常の身の丈にそって展開された空間性の実態と、その「上海らしさ」の現れにも、筆者は興味をそそられる。本書のカラー口絵で紹介される創刊号表紙の下辺に印刷された「上海北四川路良友印刷公司印行」のロゴ、とりわけその「北四川路」の四文字に、筆者は正直一見してシビれるものを感じてしまった。(表紙デザインの変遷については、本書田島奈都子氏の「『良友』の表紙にみるモダンデザインの受容」が興味深い)

『良友』創刊から一年後、良友公司是鴻慶坊から北四川路を南に600mほどのところに移転して、路地裏から表通りへの「進出」をはたす。このとき通りの斜め向かいには、商務印書館の虹口分店がすでに営業しており、またここは虹口の中心街に近く、1930年代初め頃には、良友会社の周囲半径500mほどのうちに10館前後の映画館が集中するという、上海屈指の映画街の至近に位置していた。編集部 の立地環境と、『良友』誌上で映画関係の記事が一貫して大きな比重を占めていたことは、あながち全く無関係のこととはいえないのかもしれない。

『良友』記事の内容的な比重の検討をまえに、ここで声を大にして言いたいのは、本書刊行の大きな収穫というべき、第三部に置かれた記事目録

類の充実ぶりだ。総目次と「飲食」「演劇・映画」「美術」の関連テーマ別の三種の記事目録をあわせて、本書の全ページ数の三分の一近くのボリュームを占める。ざっと目を通していただいても、なぜかだんだん本当に誌面を見ているような気がしてきて、これだけでも十分に楽しめるのだ。総目次がデジタルデータで利用できれば、その価値はさらに高まるだろう。

総目次の記事項目数は約 5,200 ほどとなり、「飲食関連」では 406 項目、「演劇・映画」660 項目、「美術関連」675 項目がリストアップされている。各種関連記事の数はそれぞれ、総目次項目数の一割前後を占めていることになる。

この関連目次にならって筆者は、さまざまな「都会的な」活動の舞台となった上海という都市空間の魅力とその特徴的な場所の意味を、『良友』がどのように誌面に表現していたのか、別の角度からいえば「上海タウン誌」的な性格をこの雑誌はどの程度帯びていたのかという関心から、もうひとつの記事目録を試作してみた。1934 年から 36 年までの 3 年間（84 期～123 期）分を抜き出して以下に示そう。

○上海の都市空間・都会性に関連した記事目次—『良友画報』1934～1936 年

84 期（1934.1）新年的街頭

85 期 都会的刺激 [写真]

87 期 如此上海—上海的声光電 [写真]

88 期 如此上海—上海之高闊大 [写真]

89 期 如此上海—上海租界内的国際形象 [写真]

91 期 一百零四度四的上海 楊村人作文、江棟良画

92 期 大上海的熱景 [写真]

97 期 上海人物素描（漫画） 江棟良作

- 99 期 上海各界举行防災大演習
- 103 期 (1935.3) 上海街頭文化 [写真]
- 106 期 上海市国際運動会
- 107 期 公園里的風光
- 109 期 回力球場—上海地方生活素描之一 曹聚仁
 〃 本屆全運健兒角逐場—上海市新建体育场各部之影撰 [写真]
- 110 期 毒囚的解放—上海市滬北戒煙医院之參觀
 弄堂—上海地方生活素描之二 穆木天
- 111 期 大飯店—上海地方生活素描之三 洪深
- 112 期 街頭巷尾—平民生活素描 [写真]
 上海的茶樓—上海地方生活素描之四 郁達夫
 舞場所見 (漫画素描) 陸志庠作
- 113 期 (1936.1) 平民福利建設—上海市新建平民新村
 百貨店的総匯—最新開幕的上海大新公司
 五十年前之上海—上海五十年前與今日之比較
 中央電影攝影場一瞥
- 114 期 証券交易所—上海地方生活素描之五 茅盾
- 115 期 五十年前之上海続編—上海五十年前與今日之比較
 都会灯光下的兩種女性生活的典型 [写真]
- 119 期 上海窮人的新樂園—平民村生活
 上海的湖心亭面面觀 張若谷
- 120 期 上海市博物館陳列品選
 新女性—上海職業婦人一瞥 [写真]
- 121 期 一代文豪魯迅先生之喪
- 122 期 女警察—上海女警察之訓練情形

記事の仕分けの基準は必ずしも厳密なものにはなっていないが、一定の傾向をみることは可能だろう。ある程度ゆるめの基準で拾い上げて、記事の数は34になった。このなかには、5人の作家たちの連作小品「上海地方生活素描」など、興味深い記事もおおい。その一方で、その量的な比重をどうみるべきだろうか。本書の3種の分野別関連記事目録のこの3年間に限った項目数と比べてみれば、その差は明らかだ。「飲食」96項目、「映画・演劇」180項目、「美術」159項目と、そこには3倍から5倍の開きがある。

林美莉氏は本書論文の前置きとして、先行する李欧梵らの論にふれたうえで、「現在『良友』画報の学術研究においては、〈都市構築〉と〈モダニティ〉という二つのキーワードが見られる」として、そこに「新しい切り口を設けるのは困難のようである」としている。だが、同時代的に進行している都市空間の構築をめぐる新状況に対して、『良友』誌面はさほど〈熱く〉なっていないようにも見える。現代の我々が『良友』に投影する「モダン上海」という問題設定は、少なくともこの領域については、当時の誌面の実際とはかならずしも重なるものではなかったというべきなのか。そんなかすかな当惑を感じた筆者に、本書「画報と画家—良友画報にみる嶺南画派の画家たち」での、呉孟晋氏の指摘はたいへん示唆的なものであった。「もちろん『良友』は総合誌であるゆえに、かならずしも美術の動向を逐一追跡したわけではない」しかし「大衆の興味を惹くグラフ誌として、『良友』は美術に関して何を伝え、何を伝えなかったのか」という相対的な視点から誌面を読み取ることは方法として有効であり、そこにおいて誌面は時代を語る貴重な一次史料となりうる、と。考えてみれば同様に、『良友』は建築雑誌ではなかったし、上海の不動産業者の読む業界誌でもなく、その読者は当然上海だけでなく、全国にまた海外の華僑たちにも、あまねきものであるべきだった。その意味では、『良友』は上海

の雑誌であって、また上海の雑誌ではなかったともいえる。そして、『良友』誌面から見えてくるモダン都市上海の空間性は、色鮮やかな表紙カバーの下の「かくれた次元」(エドワード・ホール)として都市の表層を裏打ちして遍く浸透しながら、時に顕在化して時代を超えた読者の関心にこたえたのであった。